

---

# 闇の中

岸川 澪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

闇の中

### 【Nコード】

N1751Y

### 【作者名】

岸川 澪

### 【あらすじ】

あれから半年、組織を破滅して、二人とも元の姿に戻った。

新一は蘭の元へ行き、幸せな生活を取り戻しつつあった。

すべてが元に戻って、すべて幸せになれた、そう思っていたが、一人、まだ闇の中に取り残された人がいた。

志保は、新一の事を好きだったがそれを言うべきではないと感じ、いえずにいる

ずっと精神安定剤を手放せず普通に生活できない・・・。

そんな闇の少女を救ってくれたのは、一人の怪盗だった・・・。

快志ですが、新志もあります

## ブローグ

「はぁ・・・はぁ・・・いやぁぁぁあつ・・・！」

8畳半の部屋に悲鳴が響いた

「ゆ・・・め・・・」

一人の女性がベッドから起き上がり、机の上においてある薬を一錠飲んだ

「コレがないと、普通に暮らせないなんてね・・・」

精神安定剤だった・・・

そのとき、ドアが開いた

「大丈夫か志保君・・・」

「ええ・・・」

今薬を飲んだところ・・・

また・・・寝るわ」

ドアを開いた人間はそのことを聞いて安心したかのようにドアを閉めた

女性は暗闇の中ベッドに戻り、また眠った

毎日コレを繰り返す

安心して眠る事が出来ない女性・・・

でもそんな事を知らずに毎日を笑顔ですごせる二人・・・

この3人の違い・・・

切なきスガタ

朝日に照らされ目が覚めた

どうしても朝気持ちよく目が覚めない

その理由は恐らく、夜中薬を飲むからだろう

私は着替え、リビングへ行った

「おはよう志保君」

「おはよう・・・」

私は何気なく時計を見た

7時半だった

あの人が来る時間・・・

私はキッチンへ行ってお茶を注ぎ、それをもってソファーに座った

「志保君は、今日も研究をするのかね？」

「ええ……」

FBIに完成させてくれって頼まれているから……」

「そうか……」

研究……

組織を破滅して私が元の姿に戻った時、薬を完成させてくれとのFBIからの依頼があった

あの薬はまだ完成しておらず、今のボスはあの時自殺をしたため薬の目的は闇のまま

あの薬のデータは初めからあって、元は完成した薬だったものの、私の両親が亡くなる数日前にすべての薬を焼ききってしまい、薬そのものはなくなった

ただしボスが持っていた薬のデータを元に私に薬を作らせていた

でもその薬のデータはとても膨大なもので、USBメモリがひとつ埋まるぐらいのデータで私が薬を作れといわれたときから私が組織を抜けるまでの間に3分の1ほどしか完成していなかった

そしてFBIにそのデータを元に完成させることが出来たら、その薬をFBIに提出して欲しいと頼まれた

その薬の効果調べてみるらしい

ということで私は四六時中薬の研究を続けている・・・

組織にいた頃と変わらない・・・

私はよく思う

でも、コレは私に依頼されたとき、やるのかやらないのかといわれて、私がやるといったものだから、私がやらなければいけないことだった・・・

「はよあゝ」

最も会いたくない人間が来てしまった・・・・・・・・・・

工藤君だった・・・

彼はいつもここで朝食をとっていた

「宮野く朝飯」

「ここは食堂じゃないの・

自分の家で食べなさい」

「いーじゃねえか

オメエの作る朝飯ちゃんという入ってて体にいいし」

「フランス料理を作っているわけじゃないわ

簡単だから自分で作りなさい」

「料理が出来ない」

「蘭さんに教えてもらえばいいでしょう」

「んなこといーからくれよ」

「テーブルの上にあるものを食べるか、餓死しなさい」

「コッッ・・・」

でもそんな事をいいながらちゃんと用意してくれてるじゃないか」

「私たちのものあまりものよ

どうせ私たちのものだって昨日作ったものなんだから」

「ふうん

にしてはうめえな」

「あつそ

私、いないから」

「ちゃんとしたものあるのに自分はたべねえのかよ

もったいねえ」

「あらそう」

「可愛くねえ」

「・・・・・・・・さつさと食べて学校に行きなさい」

「へーへー」

「ごちそうさまでした」

「どーせそこに蘭が待ってるから、いくよ」

「じゃーな」

「・・・・・・・・」

『蘭』という彼の口から出てくる単語に心を刺されるような気がする

彼は元の姿に戻ってすぐに蘭さんに告白し、付き合い始めた

あの日、工藤君の告白をする場を見て、泣きそうになって家に向け

戻  
っ  
た

と  
て  
も  
恐  
ろ  
し  
か  
っ  
た  
か  
ら  
・  
・  
・  
・  
・

切なきスガタ（後書き）

快斗くんがでない・・・

嘘

私は昼まで研究をしていて、博士は今日から北海道で学会があるらしく、家を空けている

私は昼になり、朝ごはんを食べていない事に気付いてリビングの下りてきた

ピンポン

チャイム……

今日は誰も来る予定なんかないはず……

そう思いながらインターホンにつながる受話器をとった

「はい……………」

「あ、志保ちゃん

俺俺、快斗」

今日は学校のはずじゃ…………

そう思いながらドアを開けた

ドアの先にいるのは工藤君と瓜二つの彼の姿

「入りたければ入りなさい」

「おじゃまします」

「あなた何しに来たの？」

今日は学校のはずでしょう？」

「サボリ

テストなんてやってらんねえからよ」

「仕事ばかりで勉強してないわけね」

「だって高校生がテストする時期にだけ仕事がなかったら犯人は高校生だってあのバカな警部でも気付くだろう？」

「もう父親を殺した人を見つけたんだから、やめにすればいいのに・」

「でももうたいしたことはしてないよ

空飛ぶくらいだから」

「あ、そ」

「ところで工藤は？」

「バカね、あの人は学校よ

行かないとガールフレンドに殴られるって言ってたもの」

「なるほどねえ・・・」

俺にもそんなガールフレンドがいるんだけど、フレンドに出来るほど同じレベルじゃないんだよ」

やっぱり志保ちゃんと話していると気楽だなあ・・・」

「どうしてよ」

「わかんない・・・」

でもコレだけはいえるよ・・・

志保ちゃんは、工藤の事が好き・・・そうでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「その顔は凶星かな？」

「ちがうわ！！」

どうして私があんな人を・・・」

「嘘をつきたければつけばいいよ？」

その分苦しくなるのは自分なんだからさ」

「・・・っ・・・」

何よ・・・そんな事言いに来たわけ？

だったら帰りなさい」

「ちょ・・・志保ちゃん！」

私は返事をしなかった

出来なかった・・・

もしこれ以上の事を聞かれたら、隠し通せる気がしない

もうどうでもいい・・・

私から何が離れていこうと、元々私にはそれを持つ価値などないのだから・・・

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1751y/>

---

闇の中

2011年11月4日08時12分発行